

焼け豚物語

『エリア随筆』といえ、数多くの英文学の名作のなかでも指折りの一級品。エスプリとウィットにあふれる佳品として広く知られている。

著者はチャールズ・ラム。この『エリア随筆』一作だけでも、彼が相当の力量の持ち主であることがわかる。例えば、〃人間は、いかにして肉を焼くことを知ったか〃といったテーマも、ラムの手にかかると、まず、こんなふうになる。

人間が、まだ生肉を食べることしか知らなかった太古、中国のある所で豚飼いの子供が火遊びをしているうち、家（といってもワラと木の掘っ立て小屋だが）に火が移って丸焼けとなってしまった。当時は人間も家畜も同じ屋根の下に住む人畜同居時代だから、子豚も家もろとも焼けてしまった。豚飼いの子供が呆然としてみると、焼け跡から、えもいわれぬ匂いが漂ってくる。どうやら丸焼けになった豚かららしいので指でさわってみると、やけどをするくらい熱い。思わず指を口にもつていく（？これは英国式で、東洋人なら耳たぶで冷や

そうとするはずだが。こうしてその子供は、世界で初めてあの焼き豚の、バリバリした皮の味を知ったと……。

父親が帰ってきて、大事な子豚が死んでいるので子供をなぐるうとするが、いい匂いがするので、これも子豚にさわってみる。まだ熱い。指を口に……そして世界で二番目に焼き豚の味を知った人間になる。その後、この豚飼いの家では子豚が生まれるたびに火事になるので、人々が不審に思っ探ってみると親子で豚を……と分かり、親子ともども裁判にかけられる。

が、法廷で、この親子と同じ「実地検証」を試してみた裁判官は、「焼き豚は、それを焼いた火事の規模のいかにかわからず、灰になってしまわないうちに料理できれば申し分のないものである」といって、親子を無罪にしたのだった。

日本の作家にも、ぜひ、こんな粋な話でも書いてもらいたいものである。

